

介護老人保健施設 寺田ガーデン レポート 平成22年9月1日

【学校方式を始めたきっかけ】

・老人保健施設の大切な役割の一つである、在宅復帰支援機能を向上させ、1人でも多くの皆様にご自宅で健康に長生きしてもらいたいと考えたためです。

【寺田ガーデンの願い】

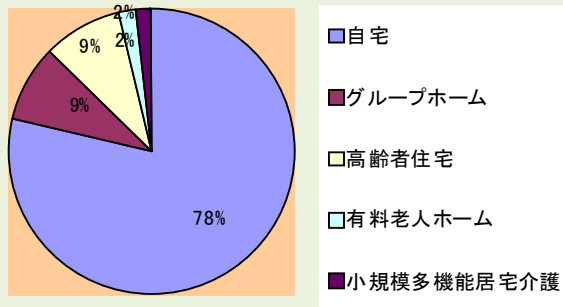
- ◆生活リハビリを大切にし自立を応援します
- ◆1人1人の個性を尊重し、プライバシーを大切にします
- ◆レクリエーションを通じて明るく楽しい生活を提供します
- ◆地域とのかかわりを大切に、家庭復帰をめざします

学校方式導入前後の変化

【在宅復帰率】

導入前	導入後(H21)
4%	31%

【在宅復帰先の内訳】



項目	導入前	導入後
利用者の変化	<ol style="list-style-type: none"> ①入所生活にプログラムがなかったことにより、時間を意識することが少なかった。 ②ボーっとしていることが多かった。 ③自発的に会話をすることが少なかった。 	<ol style="list-style-type: none"> ①1日のプログラムがあることにより、時間を意識して、家族に腕時計がほしいと話される方がでてきた。 ②授業を楽しみにされ、今日の授業は何？といわれる方が多くなり、笑顔が増えた。 ③言葉数が増えたり、発語が明瞭になった。
ご家族の変化	<ol style="list-style-type: none"> ①ご家族との関わりがしっかり持てていなかった。 ②施設に預けたら面会にもあまり見えず、関心がない様子。 	<ol style="list-style-type: none"> ①入所時からの面談や、成果発表会の機会を通じて、ご家族にとっても話しやすい関係ができてきた。 ②成果発表会で成果が目に見えるようになったことにより、本人の変化に気づいてもらえることが増えた。
スタッフの変化	<ol style="list-style-type: none"> ①くもん学習療法への認知度が低かった。 ②業務(三大介護)優先で利用者とかかわることが少なかった。 ③利用者に正面から向き合えていない部分があった。 	<ol style="list-style-type: none"> ①個別コミュニケーションの重要性、一人一人の利用者の変化に気づこうとする気持ちが生まれてきた。 ②学校方式を通じて、利用者に関心をもってもらえるように工夫をしたりし、かかわる時間も増えた。 ③利用者自身を見ようとするスタッフも増え、スタッフのやる気にもつながっている。

学校方式の成果(効果)

～成果発表会にて～

入所者 T 様が成果発表会で、舞台上にて、司会スタッフよりご家族に何か伝えたいことはありますか？の質問に『言うことは何もない。"ありがとう"だけ。』と話され、主介護者の孫さんが「こんなことははじめて言われた」と目をうるませて感激されていた。

まとめ

●学校方式を導入したことにより、利用者様やスタッフにとっても良い緊張感や刺激を受けられていると思う。これまでは利用者にはやれないと思っていたことも、実際にくもんや授業に参加してもらうことで、利用者様の可能性も感じるようになってきた。また、ご家族とも成果発表会や茶話会にて交流する機会が増え、少しずつ本音での話が出来、在宅復帰にも結びついている。今後の課題としては、入所時の目標と学校方式で取り組む内容がしっかりリンクしていないことがあるので、利用者・ご家族様の本音をうかがい、より明確な目標設定をしていくことが重要と感じる。本来の介護老人保健施設の働きを促進し、関連機関とも協力し、地域に根ざした施設となれるよう頑張っていきたい。

事例紹介

●学校方式導入後に在宅復帰された方々の事例をご紹介します。

【事例1】

- 氏名: A様 ■主病名: 脳出血後遺症 ■希望: 歩行能力の向上・トイレの自立をし、自宅で生活したい
- 入所前の状態・状況: H21. 5旅行中、脳出血で倒れ、M病院でOPを受けた。H21. 8退院の時期が近づいたが、歩行は不安定で、自力歩行は困難な状態で、手の震えがあり食べこぼしが多く、尿意・便意はあるもののズボン・パンツの上げ下げに介助が必要な状態だった。
- ・入所時よりご家族・ご本人様共に、非常にリハビリに対しての希望が強く、老人保健施設で行える個別リハビリの時間が短いことに不満をもらされた。生活の中で行うリハビリの重要性の説明を行い、具体的な目標をご家族・ご本人・スタッフ間で共有することにより、歩行も手すりにつかまり15m歩けるようになり、トイレの動作が自力で行えるまでになった。ご家族・ご本人様共に特にトイレの動作が自分で行えるようになったことを喜ばれ、在宅復帰が実現した。その後は、当施設の通所リハビリテーション(デイケア)を利用しながら、自宅での生活を継続してみえます。

【事例2】

- 氏名: B様 ■主病名: A型急性大動脈解離 ■希望: トイレ動作の自立ができるとうい
- 入所前の状態・状況: H17脳出血の既往歴有、右半身麻痺残るも何とか歩行、階段昇降でき独居生活を送っていた。H21K病院にてA型急性大動脈解離と診断、OPを受けた。入院中、下肢筋力の低下みられ、歩行、階段昇降困難となり排泄時の介助が必要となった。自宅はビルの2Fでエレベーターはなく、20cm20段の階段を上がらないといけないため、昇降機必要で、その操作も大変であった。
- ・入所時は車椅子の自操うまく出来ず、トイレ介助も必要な状態で、つかまり立ちも不安定な状態であった。居室にて休んでいることも多かった。少しずつ授業に参加するようになり、意欲が出てきた。“自宅に戻りたい”と希望をしっかりと持ってリハビリに取り組めるようになった。トイレ動作見守りで行えるようになり、装具をつけて手すりを持ち、階段昇降まで見守りで行えるようになったため、昇降機のレンタルも必要なくなり、在宅復帰をすることが出来た。その後は小規模多機能サービス利用し、ご自宅での生活を継続してみえる。

【事例3】

- 氏名: C様 ■主病名: 腰部脊柱管狭窄症 ■希望: 痛みの訴えが無くなり、精神的に安定してほしい
- 入所前の状態・状況: H21. 8腰の痛みがひどくなり、歩行も困難となったため、Y病院に入院となった。1ヶ月ほど入院し、症状落ち着くが、依存心が強く、誰かに声を掛けられると痛みを訴えるも、一人のときは病室で痛みがなくなったかのように動き回っていた。
- ・入所して間もない頃は、部屋にこもりがちで、家族が面会に来るたびに泣いて痛みを訴えていた。家族も「いつも顔を見るたび、泣かれては家でも面倒がみれない」と話していた。習字が好きということがわかり、授業に参加してもらったところ、自分から家族に飾られた作品を見せ、上機嫌で話をされる姿みられ、そこから少しずつ授業に参加し、同席の人と会話が弾むようになり、ホールにて過ごす時間が増えていった。そのうち、痛みの訴えをきくことはなくなり、家族が面会に来ていつも笑顔で話せるようになった。その様子を見て、家族も外出・外泊を試みてくださり、安心され在宅復帰となった。現在も、小規模多機能にてサービス利用しながら、在宅生活を継続してみえる。

